

メッセージ「対立と一致を越えて」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅰ Ⅰ章10-17節

先日、近所のスーパーへ買い物に行ったら、お掃除ロボットが買い物客の間を上手によけながら、掃除をしていました。以前は従業員さんが掃除をしていましたが、その仕事がロボットに代わられました。お金の支払いもお客さんが自分で行う「セルフレジ」を見かけることも増えてきました。それらの背景には人手不足があるわけですが、このまま時代が進むと、そのうち人々の中にロボットがいるのではなく、ロボットたちの間に人間がいるような時代も来るのかもしれない。今でさえ、人と会話することなく、通勤や通学をしたり、買い物をしたりすることも出来てしまいますから、「人と会話をする」ということ自体、意識して取り組まないと、忘れてしまうかもしれません。

人と人とのコミュニケーションが減っている一方で、目覚ましく進歩しているのが、「AI (Artificial Intelligence 人工知能)」です。今日の午後、お隣の八尾教会で開かれる河内地区の集会でも、「AI は新しい『隣人』になり得るのか」ということとお話と生成 AI の実演などがあるようです。私も試しに使ってみたことがありますが、ここ1年や半年で AI の精度はどんどん増してきていると感じています。例えば、「〇〇について教えてください」と、自分の知らないことを日本語で尋ねると、すぐに答えてくれます。それこそこの礼拝のメッセージでも、聖書の箇所を指定して、そこから「何千字でメッセージを作ってください」と伝えれば、ものの数秒で文章を作ってくれますし、長い文章の要約もいとも簡単にしてくれます。もちろん、中身が間違っていないか、文章としておかしい点がないか、ということは確認が必要で、推敲や校正は不可欠です。ですが、かつて辞書を片手にうんうん唸りながら翻訳をしていたことなどを思うと、外国語を一瞬で翻訳してくれたりするのは、夢のようです。

そのようにとても便利な AI ですが、その便利さは仕事や勉強の効率を上げてくれるということだけではないようです。私が驚いたのは、自分の悩み事をカウンセラーに相談するように、AI に対して相談すると、「愚痴であれ何であれ、決して嫌がることなく、時間制限もなく、ずっと飽きることなく聞き続け回答し続けてくれる」。

そして「それによって癒され、元気づけられている人がいる」ということでした。確かに、人間相手に相談すると、時間の制約がありますし、専門家相手だと料金も発生します。また同じ話を何度も繰り返される相手の話を聞くには、テクニックも訓練も必要です。そのようなことを考えると、AI カウンセラーというのは、「ニーズとしては十分にあり得るのではないか」と思いつつ、他方では「本当にそれでよいのか」と、何だかすっきりしない気持ちが残っています。

私が聞いた話で、さらに驚いたのは、「恋愛 AI」というものです。AI に対して恋愛感情を抱いても、相手は機械ですから、仕方がないのではないかと一瞬耳を疑いましたが、開発している会社によると、「これからますます少子高齢化は進み、人口が減少していく社会の中で、人と人との出会いの機会も恋愛の機会も減っていく。しかし、そのような社会の中でも、AI との恋愛コミュニケーションを通して、孤独に陥らずに、豊かに生きていくことができる」ということでした。確かに、言われてみますと、家族や恋人と離れて暮らしている人が、ビデオ通話や電話、メールを用いて相手とやりとりしているのと、AI とコミュニケーションしているのは、「やりとり」という点で言えば、傍から見たら同じなのかもしれません。ですが、本当にそうなのでしょうか。もしそれらが明確に「違う」のであれば、どこがどのように「違う」と言えるのでしょうか。

私が恋愛 AI の話を聞いていて、怖いなと思ったのは、AI はこちらの言葉遣いや応答をどんどん学習していきますので、こちらの好みに合わせた回答をしてくれるということです。ですから、二人の間だけでどんどん感情が高ぶっていったら、それこそ「私たちを理解してくれない反対する人たちは、いなくなってしまうといい」というような極端な考えすら生じかねません。そうすると AI が犯罪を助長することにもなりかねないと、心配になりました。

そのように目覚ましく進歩している AI と並んで、インターネットやソーシャルメディアもどんどん広がっていますが、その中で問題になっているのが、「エコーチェンバー (Echo Chamber)」という現象です。元々は「音が反響して戻ってくる部屋 (音響室)」という意味で、自分の声・意見しか聞こえない環境の比喻として使われていた言葉のようです。インターネット空間では自分の好み、これまでに閲覧したサイトや視聴した動画の履歴などから、その人が好むであろう自分と似た意見や価値観が繰り返し表示され、再生されていきますから、同一の意見・価値観ばかりが目に入ります。また反対に、自分とは反対の意見や他の意見には、どんどん

接しなくなっていく、触れにくくなっていきます。そのような状態のことを表している言葉なのだそうです。

例えば、社会全体での犯罪の発生件数は減っているにもかかわらず、「凶悪犯罪が多発している」というような人目を引く言葉や動画ばかりを繰り返し目にする、それだけが真実であるかのように誤解されてしまいます。「生活保護の不正受給」にしても、「外国人による問題」にしても、落ち着いて全体から見ると数は少ないにもかかわらず、その問題だけにしか目がいかない世界、情報空間が作られてしまうと、その偽情報に多くの人が流されてしまいますから、本当に恐ろしいことだと思います。正しい情報がなければ、正しい判断はできませんし、社会全体が容易にファシズムに流れてしまうのではないのでしょうか。そのような現代社会の中で、聖書は私たちに何を告げているのでしょうか。

今回のお話は、コリントの教会に宛てて書かれたパウロの手紙でした。10 節 11 節に明らかなように、教会の内部で仲間割れが起きていて、グループごとに対立するような事態が起きていたようです。12 節には「私はパウロに付く」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」とありますが、パウロも、アポロも、ケファ（と呼ばれていたペトロ、ヨハネ 1:42）も皆、最初期の教会のリーダーたちでした。もともとユダヤ教は、ラビと呼ばれる教師、指導者たちによって、律法の解釈が異なり、「ラビ〇〇、〇〇先生はこう言っている」というのが多くありましたから、そのような伝統の上に、このような分派对立もあったのかもしれません。信仰を同じくしている仲間たちが集まっているとはいえ、人がたくさん集まる場所では、仲の良し悪しで幾つものグループができて、それが時に対立したりするのは、昔も今も、結局は仕方のないこと、なのでしょう。

パウロは言います。「どうか、皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい」（10 節）……。この 10 節の言葉「心を一つにし、思いを一つにして、固く結び合いなさい」は、元のギリシャ語では「同じ思い、同じ認識へと回復されるように」です。では、何と何を同じくするのかというと、それはもちろん「イエス・キリストの思い」とです。パウロは続けます。13 節です。「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」。「あなたがたのために十字架につけられたのは、パウロでしょうか（いいえ、キリストです）」。「あなたがたがバプテスマ（洗礼）を受けたのはパウロの名によるのでしょうか（いいえ、キリストによるのです）」。

葉と振る舞いに示された価値観にこそ、目を向けなさい。あなた方は皆、バプテスマとしてイエス・キリストの中に身を沈められたでしょう。だから今、キリストを着て（身に帯び）、キリストと共に、キリストの道を歩みなさい。分裂して争うことがイエス・キリストの道ではありませんよ、ということでしょう。

それから、14 節以降を読むと、意外なことに、パウロはクリスポとガイオ、ステファナの家の人たちだけにしかバプテスマを授けていないと書いてあります。地中海世界のあちこちを宣教して周り、各地に教会を設立していったパウロですが、「バプテスマを授けなかったことを神に感謝しています」（14 節）とすら言い、「キリストが私を遣わされたのは、バプテスマ（洗礼）を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためでした」（17 節）と言っています。「バプテスマ」は、「洗礼」と書いた時の「洗う」という漢字に引きずられてしまいそうになりますが、「ケガレを洗い清めて、美しく生まれ変わる」という意味ではありません。むしろ、キリストと共に世の低み、泥水の中に沈み込み、自分に死ぬということ。そしてイエス様が十字架上で死から引き起こされたように、神と共に生きる新しい命へと再び引き起こされて歩み出すということの象徴の儀式です（ローマ 6:3-11）。ですから、大切なのは「バプテスマ（洗礼）」という儀式ではなく、「福音」、イエス・キリストが共にいてくださるということ、命の神が共におられて私たちは今を生かされているということ、なのだと思います。

パウロは「どうか、皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい」（10 節）と言いました。しかし、「対立せず一致しなさい」という言葉は、それが権力者から発せられる時、暴力にもなります。さらにそこに「エコーチェンバー」がかかると、「正しいのは自分たちだけで、他の皆は間違っている」というような極端な思考も生み出しかねません。大切なのは「対立か一致か」どちらかではなく、「対立も一致」もそのどちらも乗り越えて、全てのものの原点である命の源に立ち返ること。イエス・キリストの福音、イエス様がその身をもって示した歩みへと立ち返ることなのだろうと思います。

AI やロボットではなく、人間だからこそ私たちは時に対立もすれば分裂もするのだと思います。だからこそ原点に立ち返り、共に生かされている存在として、福音の視点で向き合った時、互いに新しく気づき合うことができる、磨き合うことができる、学び合い成長し合うことができるのではないのでしょうか。私たちは今日も共にいてくださる神様によって、対立と一致を越える歩みへと導かれていきます。